



『記憶と和解 教会と過去の過ち』

江川 憲

2000年3月12日、教皇ヨハネ・パウロ2世は、大聖年のゆるしを願うミサの中で、教会の過去の過ちについて罪責告白し、神の前にゆるしを願った。その数日前、3月7日、教皇庁教理省の国際神学委員会作成による標題の文書「Memory and Reconciliation: The Church and the Faults of the Past」が発行された。インターネットのお陰で便利になったもので、バチカンのホームページから、この文書のみならず、同日開かれた記者会見における数名の枢機卿たちのコメントまで読むことができる。その中で、教会がなぜ今、このような文書を発行するのか、様々な誤解を避けるため、その真意が説明されている。この文書に関しては、具体的な事実に触れていない等の指摘もあるが、2000年という大聖年にあたり、過去の記憶の清めと、間近に迫った21世紀へ向けて自ら率先して模範を示し、新しい対話の可能性を開こうとしているのは、高く評価できよう。カトリック教会自身も2000年の間、特に後半の1000年の間に人間によって犯された様々な罪と過ちから例外では有り得ないと明白に宣言している。このような立場から初めて、赦しと和解のための真の対話が可能となり、その時、教会はこの文書が期待するように、神の意志に適った真理の実践を成し、全世界の人々に明るい、希望に満ちた21世紀を啓き示すことが出来るのではなからうか。キリスト教内部におけるエキュメニカルな対話、諸宗教との対話、そして、様々な言語・文化・歴史を分かち持つ現代社会に生きる人々との真の対話を可能にする、カトリック教会自身の刷新を目指すのが、その目的であるという。3月12日に行なわれた教皇ミサ中の7つの共同祈願では、はっきりと、イスラエルの民に対して犯した罪の告白、愛と平和、諸民族の人々の権利と、彼らの文化と宗教に対する尊敬に反する行為の中で犯した罪の告白、女性の尊厳と人類の一致に対して犯した罪の告白、基本的人権に関する罪の告白などが宣言されている。

一昨年、ローマで開催されたアジア特別シノドスといい、今回の出来事といい、従来、時の動きに遅ればせながら対応してきたカトリック教会が第三のミレニアムへ向け、世界の動きに先駆けて、積極的に自ら範を垂れようとしている。大いに期待しかつ共働してゆきたいものである。

日本の社会においてもミレニアムという言葉が定着しそうな勢いで、世はなべて、世紀末ブームであるが、かかる時節には怪しげな終末思想が勝手に徘徊するものである。そのような運動によって常に悪用される危険性を孕む「ヨハネの黙示録」について、カトリックの側から、安心して読める注解書が出された。一般向けに解り易く書かれているが、しっかりした専門家の解釈を柱に置いている。今まで敬遠されていた方々も、この今道遥子著「ヨハネの黙示録を読む」女子パウロ会（2000年4月1日）を傍らに置き、全22章の霊的読書に挑戦されてはいかがであろうか。難解で誤解を産みやすい書物を堅実な注解書に基いて解りやすく説明しているのので、初心者にも読み通せる釈義書であり、ぜひお勧めしたい。

（Ken EGAWA：人文学部教授）

日本におけるカトリック要理の歴史を辿る (連載第二回)

伊藤 敦子

今回は要理問答書(=カテキズム)の変遷とともに、ザビエルの開教以後所謂キリシタン時代¹⁾の終わり頃までの、日本におけるカトリック要理の歴史を概観した。今回はキリシタン潜伏時代と幕末・明治初期の復活キリシタン帰正時代に、要理書がどのような役割を果たしたかを見て行きたい。

<潜伏時代>

キリシタン時代の後期、1587(天正15)年に秀吉から伴天連追放令が出されるなどして、信徒たちが司祭からの指導を受けられなくなる時代のために、イエズス会当局の指示によって幾つかの実践的なパンフレットが出版された。主祷文・天使祝詞・使徒信経・ロザリオの説明のようなもののほか、1592(文禄1)年に『病者を扶くる心得』²⁾が天草で金属活字で印刷され、また『サルバトル・ムンヂ』³⁾という題の告解指南書が1598(慶長3)年に長崎で出され、『おらしよの翻訳』は簡単な教理箇条と重要な祈りの書として1600(慶長5)年に長崎で出された。1603(慶長8)年に長崎で印刷された『こんちりさんのりやく』⁴⁾の刊本は未だ発見されていないが、写本が数種伝えられており、徳川時代の潜伏キリシタンの間で痛悔の手引書として大きな役割を果たした。

<キリシタンの発見・復活・再教育>

1858(安政5)年幕府は米英露仏蘭との間に修好通商条約を結び、徐々に鎖国体制を解消した。那覇で日本再布教の機会を窺っていたパリ外国宣教会のジラルール (Prudence Séraphin Barthélemy Girard) 神父は、翌年横浜に上陸した。同宣教会のフューレ (Louis-Théodore Furet)、プチジャン (Bernard T. Petitjean) 両神父は長崎に派遣され、1865(慶応元)年には長崎の外国人居留地に大浦天主堂を建立。ここで、浦上の潜伏キリシタンと再来日した神父との再会が実現し、浦上キリシタンは潜伏から復活したのである。

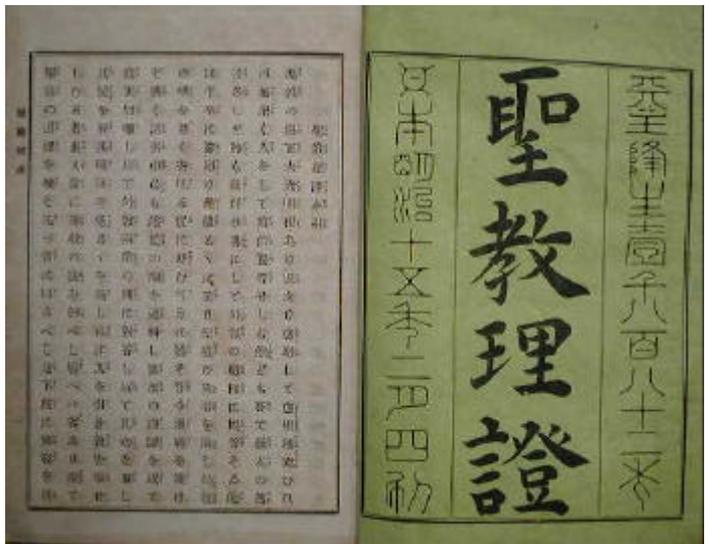
しかし、潜伏キリシタンのオラショや教えは筆記されてはいても主に口承によって伝えられ、書き言葉に通じていたのは帳方⁵⁾や水方⁶⁾などの指導者層のごく一部にすぎなかった。そのため、キリスト教の重要な用語ばかりでなく、教義や儀礼法もまた長きにわたる「潜伏」期を通じて、正統キリスト教から遥かにかげ離れたものへと変容していた。『天地始之事』⁷⁾は初め貴重なものとみなされたが、後には取るに足らぬものとして捨てられ、特に洗礼の有効性については疑義が呈されて、カトリック教会に復帰したキリシタンには改めて洗礼が授けられた。こうして宣教師は、新しく発見したキリシタンに「正統」キリスト教の教義を教え、真のカトリック教徒とさせることに多大な熱意を注ぎ込むに至った。

長崎のプチジャンとローケーニュ (Joseph Marie Laucaine) 神父、そして横浜天主堂を拠点としたムニクウ (Pierre Mounicou) 神父は、時を同じくして公教要理の編集に着手している。前者はキリシタンの再教育のために教理書を作成しようとし、後者は異教徒・日本人の改宗を主目標としていた。そうした目標の違いが両者の間に対立を起こすこととなった。

横浜においては、教養ある日本人、少なくとも読み書きのできる者が布教の対象として設定され、マテオ・リッチ以来の明清天主教理書の日本語訳の公教要理を編集しようとしていた。1865(慶応元)年には『天主教教理問答書』を訳した『聖教要理問答』を作成、翌年長崎に送っている。

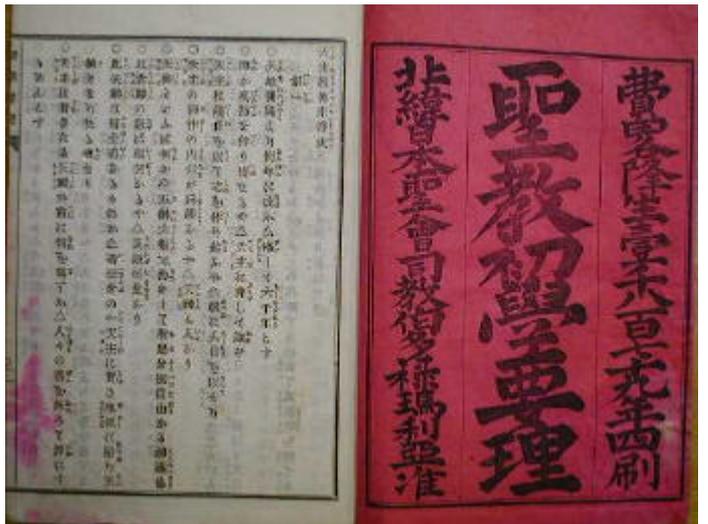
他方、キリシタンの再教育を目標としていた長崎では、『聖教要理問答』は漢語教理書の直訳的なものに過ぎないと考えられ、キリシタンに配られることはなかった。そして、キリシタンの伝承を重視した独自の公教要理を編集し、それは1868(慶応4)年に『聖教初学要理』(木版)として結実した。

そうした要理書と神父の密かな司牧により復活キリシタンの信仰は燃え上がり、ついには官憲の知る所となったが、維新政府は旧幕時代の露頭以上に厳しい態度を採り、復活キリシタンを徹底的に迫害、流刑に処した。その間プチジャンは教理書の編纂に努め、ド・ロ(Marc Marie De Rotz)神父に命じて、キリシタン版の再刻や新編など数十種の教理書を秘密出版⁸⁾する一方、外交団に働きかけて禁教令の解除を促進させた。1873(明治6)年2月、漸く政府は切支丹禁制の高札を撤去するに至った。



<本学カトリック文庫所蔵 1882(明治15)年刊(4版)>

しかし教会の主力は長崎に向けられていたために、横浜における布教はまだ殆ど見るべき効果を上げていなかった。1866(慶応2)年秋に司教に叙階されたプチジャンは、1871(明治4)年春、従来の方針を変えて横浜に司教座を移し、京浜など中央部に進出を企てた。この新布教地開拓には従来のキリシタン伝統語は不適當であるのみか、従来の切支丹邪宗門観を想起させて不利であったため、新たに京浜の知識人を対象とする文語体の教理書編輯を企図し、1872(明治5)年頃から横浜天主堂に石版印刷所を付設した。プチジャンはその印刷所で、1872(明治5)年刊の『再刊



<本学カトリック文庫所蔵 1879(明治12)年刊(4版)>

『聖教初学要理』⁹⁾と『煉獄説略』を、翌年刊の、漢書版カトリック護教書の邦訳改編である『聖教理証』、洗礼解説書である『洗滌之秘蹟之事』^{ばぶちずものさからめんとのこと}、『聖多十字架之道行』^{さんたくるすのみちゆき}、4福音書からキリス

ト受難の記事を総合編集した『後婆通志与』^{こぼつしよ}などを印刷している。

その後プチジャンは、1875(明治8)年に漢書の翻訳である『聖教初学要理 信徒之解』(洋装石版刷)¹⁰⁾を復活キリシタン以外の一般知識人のために出版している。また、翌年には『再校 聖教理証』、『天主教大略』、『聖母聖月』など漢書系の書物を相次いで刊行している。『聖教初学要理』はその後、オズーフ(Pierre-Marie Osouf)司教准許の下に若干改訂された漢書系の同題名の再版書が1877(明治10)年に木活字和装で出版され、翌年版からは活版和装で1882(明治15)年まで版を重ね、1885(明治18)年には『聖教要理』と改題された。その他、ヴィグルース(François-Paulin Vigroux)神父が教理入門書である『天主教抄略』(1879(明治12)年刊?)を出版している。

一方ド・ロは当時の農民・漁民が読めるように漢字を減らし、仮名を多く用いて活字印刷に取り組んだ。

¹¹⁾その中には、ミサ解説書である『たつときゆかりしちやのこと』(活版・1877(明治10)年刊)や1877(明治10)年刊の『光福教導』¹²⁾や『智慧明ケ乃道』^{ちえあけのみち}¹³⁾、祈りと教理を合わせた『オラシヨ並ニヲシエ』(活版・1878(明治11)年刊)がある。これ以外の仮名教理書としては、刊年



<本学カトリック文庫所蔵 1885(明治18)年刊>

は不祥であるが『切支丹の聖教 仮名増補本』¹⁴⁾や『生月聖教傳』^{いきつきせいきょうでん}¹⁵⁾などがある。『切支丹の聖教』は、1883(明治16)年に漢字混じりに書き改められ、再刊されている。

このように、カトリック教会が先ずは数多くの復活キリシタンの帰正に勢力を傾けざるを得ず、また、明治の進取の気運に適合できずに古い伝統に生きようとしたため、知識階級の心を捉えることには苦勞したのに比べ、プロテスタント諸派は、日本で厳禁された昔のキリシタンではない、全く別物であると説教したために、広く知識階級に受け入れられていった。

出版界においてもプロテスタントは、既に漢書和訓時代を過ぎて、欧米原書の直接翻訳を行っただけでなく、邦人教職者、信徒の著述も逐次現れるに至っていた。しかも、趨勢は欧化に傾いており、最早漢書への魅力は著しく減退していた。

こうしてプロテスタント出版界の盛況に反して、明治のカトリック出版界は、その出発点においてキリシタン伝統主義をとったために常に後手に回り、時流に追随できなかったのみならず、ますます知識階級から無視される仕儀となったと考えられる。

¹⁾ ザビエルの開教より1644(寛永21)年までの約100年間をキリシタン時代といい、それ以降を潜伏時代と呼ぶ。

²⁾ 仮題。原書の標題紙が紛失したため。第一章の見出しによって『パウチズモの授けやう』とも称されている。

³⁾ 仮題。題箋がなく扉紙表の"Salvator Mundi(救世主)"を書名としている。プチジャンが写本し、1869年『校正再

刻とがのぞき規則』と題し秘密開板した。

- 4) 『胡无知理佐無の略』はプチジャンが阿部真造の力を得て、仮名書きの写本に漢字を当てて 1869 年に復刻したものの。
- 5) 日曜の祈祷を司式し、瀕死の人の許に行き、痛悔を行うよう勧め、臨終の祈りをする。
- 6) 洗礼の秘跡を行う。
- 7) 隠れキリシタンの伝承による教理理解を書き留めたもの。写本として伝えられる。
- 8) 所謂「プチジャン版」または「大浦版」「ミシオン・プレス」と呼ばれるもの。
- 9) 1868(慶応4)年版の改訂・増補版。
- 10) 復活キリシタン以外の一般知識人のための編刊。
- 11) 所謂「ド・ロ版」と呼ばれるもの。殆ど仮名で綴られている。
- 12) キリシタン用語を用い、求道者のために書かれた公教要理で、天主・人などの平易な文字以外は殆ど片仮名を用いた金属活字本。
- 13) ド・ロが執筆・発行した啓蒙書。漢字制限と活版の利用についての持論を述べたもの。
- 14) 復活キリシタンの教理問答書。初版は 1877(明治10)年刊と推定され、キリシタン用語を片仮名で表記し、殆ど全文が平仮名書きで復活信徒を対象として新編されている。ローケーニュー、及びド・ロの編になると推定される。
- 15) 『ドチリナ・キリシタン』(1592年刊)付録の生月十一カ条「諸々のキリシタン知るべき条々のこと」を当時その地方で宣教に当たっていたラゲが採録し、1878(明治11)年～1879(明治12)年頃出版したと思われる。平易な漢字以外殆ど仮名で綴られている。

参考文献

- 川村邦光「犠牲としてのキリシタン -殉教と旅の重さ」(日文研叢書17) 国際日本文化研究センター
 宮崎賢太郎「日本人のキリスト教受容とその理解」(日文研叢書17) 国際日本文化研究センター
 海老沢有道他編著「キリシタン教理書」 教文館
 「日本キリスト教歴史大事典」 教文館
 「新カトリック大事典」 研究社
 海老沢有道・大内三郎共著「日本キリスト教史」 日本基督教団出版局
 海老沢有道他編著「日本キリシタン史」 塙書房
 海老沢有道著「維新変革期とキリスト教」 新生社
 「カトリック大辞典」 富山房
 海老沢有道著「切支丹典籍叢考」 拓文堂
 アジア文化研究委員会編「日本キリスト教文献目録：明治期」 国際基督教大学

(Atsuko ITO : 研究支援センター事務室)



『Relógio Litúrgico 典礼時計』

Imprimatur Porto Alegre Mons, Leopold Neis Vigarío Geral

小林 志保

カトリック文庫は、団体や個人の方からたびたび貴重な資料を寄贈していただく。これらは、どれも市場では入手しにくい資料であり、図書やパンフレットをはじめ、絵画や映像資料といったものまで、形態もさまざまである。そういった資料群のなかで、興味をひかれるものがあった。それが今回とりあげた典礼時計である。

この資料は、聖母カテキスタ会より寄贈いただいたものである。実際のところ、この資料と同じものが他では見つからず、日本ではなんと呼ばれている資料なのか分からなかった。そこで、資料に書かれた Relógio Litúrgico をそのまま日本語訳した「典礼時計」と呼ぶことにした。

(資料1) 『proprium de Tempore』 聖節の部 26-7-1938



これは、縦 95cm 横 83cm の裏打ちされた紙に印刷されている一枚物の資料である。上下に横木がつけられ、壁にかけられるように加工がされており、色刷りされた美しい資料である。また、これは「*proprium de Tempore*」（資料1）と「*proprium Sanctorum*」（資料2）の二種類あり、この二枚が対になっている。当初、この資料が教会暦に基づいて作られているらしいといったこと以外、どのような性格の資料なのかわからなかった。

というのは、これには日付が記されているものの、365日分すべては記されていないことや、日付の中には赤や緑といった色づけがされていること、十字架やフォークの形のマークがつけられていること、そしてこのマークの意味が暦のすみに書かれていることから、一般的な暦として使われていたものとは考えにくく、かといって祭具とはとても思えなかったからである。そこで、本学の聖職者でもある教員に確認したところ、これは子ども、あるいは字の読めない人びとに対する要理教育のために使われたのではないか、という指摘があった。なぜなら、ここに書かれた日付は教会の重要な祝祭日であること、塗られた色が典礼色¹と一致し、マークはその日の典礼について守るべき事をデザイン化して表されていることがわかるからである。例えば、緑色に塗られた日は年間の通常の主日を表し、添えられた十字架のマークはその日が守るべき祝日であることを意味している。つまり、色分けしたりマークをつけ、象徴的な絵を描いて、視覚的に分かりやすくしているのではないかと考えられるのである。そして何よりもこの資料の中で最も特徴的なのは、絵の中心からのびる木製の矢印である。この資料が「*典礼時計*」と名づけられたのは、円周上に書かれた日付を矢印が指すその形状が時計（= *Relógio*）のようであるためではないかと思われる。おそらくこの矢印で記された日付を示し、この日が何の日で、どのような典礼を行うのかを説明したのだろう。

それではこの資料の中に具体的にどのような内容が描かれているかを見ていくことにしよう。

（資料1）『*proprium de Tempore*』聖節の部 26-7-1938

教会では、キリストの救世上の行動を一年間に配分し、その行いを毎年一定の日に祝う。これを聖節と呼び、この聖節の部は聖節についてだけ描かれている。これには、ローマ数字やアラビア数字、一部の祝祭日や簡単な注意書きが書いてあるだけであるため、一目見ただけでは暦だとは分からない。これはしかし、聖節は祝祭の期間が数日～数週間にわたったり、年によって典礼を行う日が変わるため、日付をくわしく記載することが困難なためである。その分、注意して見ると、ローマ数字やアラビア数字が曜日や特定の日にちを意味し、注意書きと照らし合わせることで、その年の祝祭日がいつなのか特定できるように工夫されている。

もともと教会暦はローマ・カトリックのもの、東方教会のものなど、それぞれで独自のものを使用しており、また同じ教派によっても、時代や国、地方によって若干異なっている。この資料の教会暦はローマ・カトリックのものを採用しているが、現代のものと異なる部分がある。これは、その時代や地域によって、それぞれで祝うべき聖人の祝日があって、採用する祝日が異なっ

¹ 祭服の色のこと。白、赤、緑、紫、黒の五色あり、教会暦の季節や日、礼拝様式などの精神を象徴的に表す。

たり、地域独特の民族的な祝祭の日と教会の祝日が高い時間を経て一緒に祝われるようになったためであろう。例えば、この資料にみられる相違点は「受難の主日」についてである。この日は普通なら「枝の主日」と同日であるにもかかわらず、これには別々の日として記されている。これは、ブラジルの昔の祝祭日と受難の主日が同一視されるようになったためと想像される。日付のほかにも通常とは異なる点として、一年を降誕節、復活節、聖霊降臨節にわけていることが挙げられる。一年間の典礼期を三期にわけているのはかなり独特である。なぜなら、一年間は待降節から聖霊降臨日までの有祭期と、その後の三位一体の主日以降の無祭期の二期に分けられることが多いからである（新キリスト教辞典 東京 いのちのことば社 1991 P.290）。ちなみに、ここに描かれているのは幼子イエス・キリスト、その象徴である子羊、聖霊を意味する鳩で、それらは降誕、復活、聖霊降臨の各期節を象徴している。そして中心に描かれた目は「神の目」であり、三位一体とその遍在、および全知を表している。

（資料2）『proprium Sanctorum』 聖人祝日の部 23-4-1939



一方、こちらは、聖母マリアや天使、聖人の祝日、宗教上の重要な出来事を典礼で記念するために定められた日を列記している。こちらは、毎年同じ日に祝われる祝日について記されているため、明確に日付が記されている。この資料をみるところ、聖母マリアやローマ・カトリックにおけるキリスト教史上意義を持つ聖人の祝日はともかく、この教会暦で割りふられている聖人の祝日はブラジルや南米にまつわる聖人のものが多く採用されているようである。たとえば、ここでは11月27日はキリスト教教化地区に住んでいたインディオ達がポルトガル人らに襲撃され、奴隷として売り払われたことを悼む祝日であり、12月12日はメキシコのガダルーペ市に聖母マリアが出現したことを記念した祝日である。ローマ・カトリックでは11月27日は聖人の記念日にはなっておらず、12月12日を聖ヨハンナ・フランシスカ修道女の日としている（『教会の聖人たち』東京 中央出版社 1981）。また月毎に描かれている絵は、その月のなかでも一番大きな祝日に関するものである。例えば、1月には1月6日の主の御公現の様子が描かれ、主の御血の祝日がある7月にはイエス・キリストの血を受け取る天使が描かれている。

今回とりあげたこの典礼時計は、第二次世界大戦頃につくられたものだが、現在使われていない言葉が多く用いられていることが分かった。そのような言葉の中で、カトリックの金曜日の祭りという意味の“temporas”と言う単語が暦中にしばしば登場してくる。これはまた日本語の「天ぷら」の語源になっているという説があることを教わった。というのもこの日、カトリック信者は肉類を食べないことから、野菜や魚の料理を temporas = 天ぷらと呼ぶようになり、それが転じて、これらを揚げてつくる料理を天ぷらと言うようになったとするのである。（新編 大言海 東京 富山房 1984）今では古語となった言葉が、思わぬ形で日本語として定着した例であり、とても興味深い。言葉に限らず、この資料が作られた後のバチカン公会議において、祝日も大幅に変更が加えられ、現在ではここに記された祝日のうち、多くが祝われなくなり、暦自体かなりシンプルになったようである。このような資料は公に出版されるものではないため、変更されると、その都度古いものは廃棄されてしまう。こうして残された過去のものと新しいものを見比べ、祝日の変遷を遡ることによって、その時代の祝うべき聖人から人びとの規範や文化、社会的な背景が類推できておもしろい。

最後に、この資料を調べるにあたって、江川憲、Domingos Sousa 両神父に多くのアドバイスをいただいた。この場を借りて感謝を申し上げたい。

参考文献

- 『カトリック大辞典』 東京 富山房 1954
- 『キリスト教大事典』 改訂新版 第6版 東京 教文館 1981
- 『キリスト教百科事典』 東京 エンデルレ書店 1981
- 『聖人事典』 東京 三交社 1998
- 『世界の国ぐにの歴史 11 ブラジル』 東京 岩崎書店 1991

(Shiho KOBAYASHI : 学術情報センター)

資料寄贈者(前号以降～2000.6)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈していただきました。
ここにお名前を掲載させていただき、改めて謝意を表したいと存じます。

[個人]

口吉 氏(南山学園)、阿江茂氏(南山大学名誉教授)

[団体]

聖霊学園(秋田)、イエスの小さい姉妹の友愛会

<<カトリック関係資料 寄贈のお願い>>

本学図書館では、わが国におけるカトリックの歴史・文化・活動を知るために、関係資料の散逸、
毀損を防ぎ、かつ広く研究者などへの利用を図ることを目的とし、「カトリック文庫」を1993年
より設置し、下記の資料を収集しております。

* 教会刊行物(教会史誌・教会報、その他)

* 明治、大正、昭和初期のキリスト教関係出版物

(聖書・祈祷書・聖歌集・要理書 およびそれらの解説書、雑誌・新聞・布教資料、その他)

* 修道会史・教会史 および関係刊行物・資料

* 日本への布教に関する外国側資料

つきましては皆様方から資料の寄贈を賜りたく、ここにお願ひ申し上げます。

なお、資料は選書の上、本学図書館の蔵書として所蔵させていただくこととなりますので、
ご了承ください。



カトリック文庫委員会新委員紹介

佐藤裕子(学術情報センター・整理係)

あまりに広く大きな存在として感じることの多かったキリスト教ですが、
その奥深い世界について、少しずつ謙虚な気持ちで学んでいけたらと思います。

今井麻里子(学術情報センター・逐次刊行物係)

文化的・社会的・歴史的に豊かな背景を持つカトリックの資料に触れ、自分自身の興味の幅
を少しでも拡げて行けたらと考えております。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第14号 2000.7.10発行 南山大学図書館「カトリック文庫」委員会

編集委員: 笹山達成、佐藤裕子、小林志保

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

ホームページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/dyuna/midashi.htm>

E-mail: library@ic.nanzan-u.ac.jp TEL: 052-832-3163 FAX: 052-833-6986 担当者: 笹山